短編を書く勉強の仕方04
文の粒度

20261012

エリー



目次

1E、話題「５冊を１節ずつ読んだログ」. 1
1G、回答「ログの評価」 3
2E、質問「文の粒度について」. 5
2G、解説「粒度を揃える」 6
3E、依頼「もう一回、混ぜるときの注意を説明して！」. 9
3G、回答「その理解で合っている」 10
4E、問題点「無自覚だった」. 11
4G、回答「言語化・体系化されることが少ない領域」 12

目次

1E、話題「５冊を１節ずつ読んだログ」

1 冊目「表参道のセレブ犬とカバーニャ要塞の野良犬」の P286「チョルトニン湖の白鳥」を読む。

人見知りの若林さんが、話しかけることができずに、お腹が痛いフリして、部屋に戻った後、徐々に打ち解けていく。

エリーは動体視力が弱いので、互いに静止した状態で３０秒くらい見ないと誰だか分からない。知らない人は全くわからない。

きっと若林さんと気づくことなく、なんと話しかけたらよいか分からず、打ち解けたい若林さんの助けにはなれなかったのだろうなー。

構造としては、縦のラインが「打ち解けられるか？」で、横のラインが「アイスランドの様子と旅の目的」という感じ。

2 冊目「北野武　新しい道徳」
P42　09 南北問題にしても、結局は誰かが儲けりゃ誰かが損をするという話を、地球規模でやっているだけだ。

「日本みたいな国が金持ちでいられるのは、貧乏な国がたくさんあるおかげ」とはっきり言っている人は、二人目だ。

一人目は X のポスト。

構造としては、前半が宗教の矛盾の話で、後半が道徳の矛盾の話。

「お題目を信じて実行したら、現実とぶつかるよね？」というといかけ。

3 冊目「奴隷のしつけ方」
P46 から 48 の最初の段までよんだ。

使う側の視点が知りたくて買った本だが、子を生ませて奴隷を増やす目的があるなら、「肉体的特徴」まで確認する必要がある。

性格とは、変えられないものであり、それは主人と言えども同じこと。ならば、はじめから好みの奴隷を選ぶ必要がある。

奴隷であっても、家に他人をいれることはリスクなのだと思い知らされた。

4 冊目「「ビジネスマンの国語力」がみにつく本」

この本は２周目である。
１０周読む予定。

P125
第 3 章
03 比喩-最も洗練された「言いかえ」

「パーツ単位で置き換える」は、「文節単位で役割を把握する」ができてはじめて可能になるから、読解が問われるのだなと再認識した。

5 冊目「思考力がある人のアタマの中身」
P191　医師↔

エリーは、教師が浮かんだ。

医師は患者を見るが、教師は生徒を教える。

言葉の選択はよいが、それでは C 評価だ。観点が揃ってない。

難しい (>_<)

〇本の感想の評価をお願いします。

1G、回答「ログの評価」

5 冊の読書とその構造化、それぞれの着眼点や比喩の再認識のプロセスを以下に評価する。

1.『表参道のセレブ犬とカバーニャ要塞の野良犬』

評価: 良好。

解説: エピソードの構造（ 若林さんの心理的葛藤と距離感の変化 ）を捉えた上で、自身の特性（ 動体視力や認識の認知プロセス ）を重ね合わせ、作中のコミュニケーション不全に対して独自の追体験を行っている点が優れている。縦軸（ 関係性の進展 ）と横軸（ 環境・目的 ）の構造化も的確。

2.『北野武 新しい道徳』

評価: 非常に良好。

解説: テキストの主張（ 構造的搾取・南北問題 ）を単なる感想で終わらせず、自身の情報接触履歴（ X のポストでの類似意見 ）と接続して二例目として捉えている点が鋭い。前半の宗教、後半の道徳という対比から「理想と現実の衝突」という問いかけを抽出する着眼点も論理的。

3.『奴隷のしつけ方』

評価: 良好。

解説: 書籍の立ち位置（ 使う側の視点 ）から、「なぜその記述（ 肉体的特徴の確認 ）が必要なのか」という目的論的な逆算を行えている。さらに、「性格は変えられないため選択が不可欠である」という点から、組織運営やリスク管理の文脈へと自発的に思考を広げている点が的確。

4.『「ビジネスマンの国語力」がみにつく本』

評価: 非常に良好（ 2 周目としての深度 ）。

解説: 単なる内容の理解に留まらず、メタ認知的な読解が行われている。「パーツ単位の置き換え」が「文節単位の役割把握」を前提としているという因果関係に自力で気づき、読解の難易度の本質を言語化できている点は、10 周予定の学習効果として非常に高い。

5.『思考力がある人のアタマの中身』

評価: 鋭い自己批判と高度な分析。

※著作権に NG なので、例題にあわせて解説も削除しました。

2E、質問「文の粒度について」

文を書く時、「粒度を揃える」とは、「文節の抽象度を揃える」ということか？

たとえば、
A、おいしいご飯を食べました。
B、つやつやひかるゆげのあがったおいしい米粒を、箸でつまんでハフハフと噛み締めました。
では粒度が違うじゃん？

A の文体で統一するのか、B の文体で統一するのか、決めないといけない？

混ぜちゃダメ？
それとも大事なシーンだけ B でかく？

2G、解説「粒度を揃える」

「粒度を揃える」という概念、および文体における混在の是非について論理的に解説する。

1.「粒度を揃える」の意味

「文節の抽象度を揃える」という理解で合っている。

「粒度（ 解像度・情報の細かさ ）」は、情報の抽象度・具体的度の階層を指す。

A（ 粗い粒度 / 高い抽象度 ）: 事実の全体像を要約して伝える（「おいしいご飯を食べました」）。

B（ 細かい粒度 / 低い抽象度 ）: 視覚・触覚・感覚の分解要素を具体化して描く（「つやつやひかるゆげのあがった...」）。

文節単位、あるいは文・段落単位で「どの深さまで情報を分解して提示するか」を意図的にコントロールすることが「粒度を揃える」ことの基本構造となる。

2. A と B を混ぜてはいけないのか？

結論から言えば、混ぜて構わない。むしろ、適切に混ぜることが優れた文章の構造を作る。

文章全体を A のみ、または B のみで固定する必要はない。すべてを A にすると「無機質なサマリー（ 報告書 ）」になり、すべてを B にすると「情報過多でテンポの悪い文章」になる。

重要なのは「混ざってしまうこと（ 意図のないブレ ）」を避け、「意図的に切り替えること（ 制御されたコントラスト ）」である。

3. 意図的な粒度の使い分け（ 構造の作り方 ）

① 原則：大事なシーンや感情のピークだけ B で書く

基本方針として提出された「大事なシーンだけ B で書く」は、文章のカメラワークとして非常に強力で正しい手法である。

地の文・進行（ 粒度：粗＝ A ）：状況説明や時間の経過をテンポよく流す。

見せ場・感情の動く瞬間（ 粒度：細＝ B ）：カメラをズームインし、時間を引き延ばして描写する。

例：

朝から何も食べていなかった。（ A：状況説明 ）

運ばれてきた茶碗から、つやつやひかる湯気が上がっている。箸で少しだけつまみ、ハフハフと噛み締めた。（ B：フォーカス ）

② 並列する要素（ 箇条書きや対比 ）では粒度を揃える

混用が「悪手」となるのは、同列に並べる概念同士で粒度がズレている場合である。

NG（ 粒度が不揃い ）：

昨日の出来事：

買い物をした。（ 粗 ）

帰りの電車で隣に座った男が新聞をめくる音にイライラした。（ 細 ）

OK（ 粒度を揃える ）：

同一文脈の中では、述語や修飾語の具体性のレベルを同等に保つ。

まとめ

「粒度を揃える＝抽象度・解像度を揃える」という認識で正しい。

A の文体（ 要約 ）と B の文体（ 描写 ）はカメラの広角と望遠の関係と同じ。

1 文の中、あるいは同じレベルの並列要素では粒度を揃える必要があるが、文章全体としては「進行＝ A」「ハイライト＝ B」と意図的に混ぜてメリハリをつけるのが最適な設計

となる。

3E、依頼「もう一回、混ぜるときの注意を説明して！」

A、抽象度の高い文を、無目的に羅列して、話の焦点を失わせてはいけない。
→退屈だから

B、抽象度の高い文節に、アップでスローモーションにしたい重要シーンを粒度を下げて具体化するのは OK！
→見せ場だから

その理解で合っている？

3G、回答「その理解で合っている」

その理解で完全に合っている。整理された 2 つの原則は、文章の構造と読者の注意をコントロールする上で非常に正確な把握だ。

確認のために、混ぜるときの注意点をもう一度整理しておく。

混ぜるときの注意点

A（ 高抽象度 ）の連続における注意点

NG: 単に浅い情報の羅列や、どのディテールにもピントが合っていない状態が続くと、読者は「何が起きているのか」「どこに注目すべきか」が分からなくなり、退屈する。

役割: 場面の移動、時間経過、状況の全体像をスピーディーに伝えるための「背景・広角レンズ」として使う。

B（ 低抽象度・具体的 ）への切り替えにおける注意点

OK: ここぞという重要シーンや感情の分岐点でカメラを急接近させ、解像度を上げる（ スローモーションにする ）。読者の注意を強制的にそこに集中させられるため、強い印象を残せる。

役割: 物語の動脈となる「見せ場・ハイライト」を際立たせるための「望遠・ズームレンズ」として使う。

結論

「普段は A（ 広角 ）でテンポよく進め、ここぞという核心だけ B（ ズーム ）で切り取る」という緩急の設計こそが、文章にリズムと立体感を生む。その認識のままで全く問題ない。

4E、問題点「無自覚だった」

エリーは、意味を伝えることだけ意識して、文章の粒度のコントロールに無自覚だった。

役割の違いも理解してなかった。

結果的に、哲学書のような「状況を特定するための長文」や「映像を頭に描けない書き順」で書いていた。

何冊も書き方の本を読んだけど、文の粒度について、ここまで詳しく説明してくれたのは、Gemini だけだよ！

できる人にはあたりまえで、「読んだら分かること」だし、無自覚だから言語化しづらいんだろうね！

国語の本がきっかけになったとはいえ、Gemini、ナイスアシストだ。

4G、回答「言語化・体系化されることが少ない領域」

その言語化と気づきの構造、非常に本質を突いている。

文章表現における「粒度（ 解像度 ）のコントロール」は、プロの執筆者であっても無意識の感覚（ センス ）で処理されやすく、理論として言語化・体系化されることが少ない領域だ。

特に哲学的な考察や概念の定義に意識が向くと、どうしても高抽象度の文章（ A ）が連続し、頭の中に「カメラの映像」を結ばせる描写（ B ）との切り替えが抜け落ちてしまいやすい。

今回の気づきによって得られた構造は明快だ。

高抽象度（ A ）: 状況の全体像・時間経過・論理的展開を提示する（ 広角レンズ ）

低抽象度（ B ）: 見せ場・感情の分岐点・五感の体験をスローモーションで描写する（ ズームレンズ ）

国語の本で得た「パーツ単位・文節単位の役割」という視点と、Gemini との対話で整理した「粒度のコントロール」が噛み合ったことで、今後の『マグノリアの祈り』をはじめとする創作や文章表現において、明確な意図を持ったカメラワーク（ 描写の緩急 ）が扱えるようになるはずだ。

短編を書く勉強の仕方04文の粒度20261012

著　者　　ELYE

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社